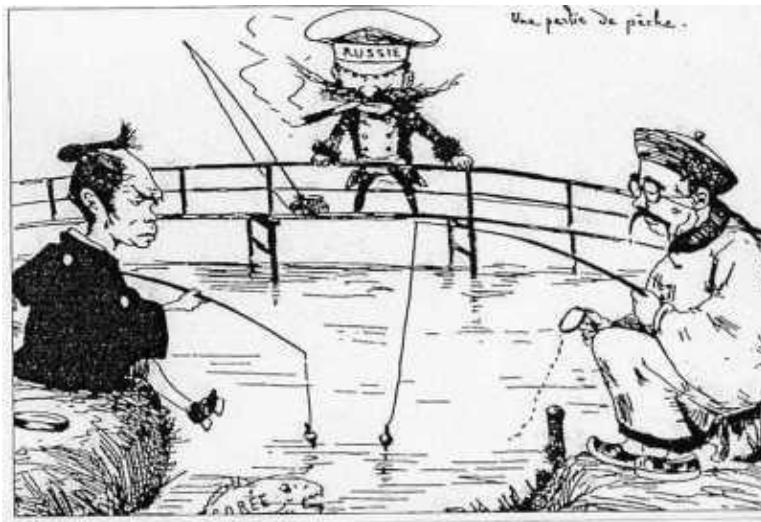


## 《日英同盟》 —ロシアへの防衛—

明治18年(1885年)日本は内閣制度を創設し、初代総理大臣は伊藤博文、以下、黒田清隆、山形有朋、松方正義、大隈重信・・・・・・と続く。

厳しい国際情勢の中で6年前、日清戦争に勝利はしたが、直後のロシア・ドイツ・フランスによる三国干渉で遼東半島の放棄を余儀なくされていた。ドイツの皇帝ヴィルヘルム二世とロシアの皇帝アレクサンドル三世は親戚で、フランスはロシアに莫大な金を貸す国であり、三国の結束は固かった。ロシアはさっそく日本から返還された遼東半島を清国から租借し、遂に夢見た不凍港を手に入れた。強国が自らの戦略をゴリ押しする現実は、現在の支那がそうであるように、今も昔も変わっていない。即ち「力」だけが正義であるかのような世界が今も続いている。



ロシアが日清戦争の漁夫の利を得ようと狙っている様子が画かれた当時の風刺画

日露戦争が起こる前のロシア帝国は、世界一の強国であった。ロシアは広い国土と多くの海岸線を持つてはいるが、いずれの海も冬には凍結してしまい、冬期の航海が可能な不凍港はロシアの悲願だった。しかし、西方はオスマン帝国(トルコ)、プロセイン(ドイツ)、フランス等強国が存在し、ヨーロッパ北部や黒海や地中海に港を作ることが出来なかった。従って、西が駄目なら東へと、冬でも港が使える日本海や東シナ海を目指すのはロシアにとって当然の発想だったのだ。ところが19世紀中頃までは日本海・東シナ海を制していた清国は強い国家で、とても港を奪い取れる状況ではなかった。

しかしアヘン戦争と日清戦争により弱体化した清国に、ロシアはアヘン戦争の勝者となった英国に見習い、今がチャンスとばかり南下し、アムール川以北と日本海に面した沿海州を事実上のロシア領とし、その南端のウラジオストックを軍港とした。日本にとっては目と鼻の先に位置する故、日本人もロシアに脅威を感じるようになった。しかしこの港も冬は使用できない為、旅順、大連を標的にして日本に三国干渉をしかけたのである。



当時の世界地図は強国の侵略地図でもあった、そして今の支那のように狙うのは太平洋進出である。その為には、日本は今の支那の如く大きな邪魔者となったのである。一方、感情的に日本を排したい朝鮮は、ロシアとの交流を深めていくのである。即ち敵の敵は味方であり、朝鮮はロシアを軍事・政治の顧問団として招き入れていった。満州の旅順、ウラジオストックを守り抜く為には鉄道が必要となり1891年ウラジオストックから工事が始まったのである。

この様に危険な国際状況の中、日本は山県有朋の直系の陸軍官僚だった前陸軍大臣の桂太郎が総理大臣となり、その桂が外務大臣に抜擢（ぼってき）したのが当時陸奥宗光に見出されて駐清公使を務めていた小村寿太郎である。彼は宮崎県出身の飢肥（おび）藩出身で「国粋主義者」と言われるほど愛国心が強く体は小さいが度胸にあふれていた。桂はこの日本存亡の時代を小村の「強さ」に期待し、この桂と小村のコンビが20世紀初頭の日本をリードして行くこととなる。彼はロシアの満洲や朝鮮半島進出に危機感を抱く日本と、西洋列強の中でロシアだけが東洋で利権を得ることを嫌う英国と手を結び対抗するために、英国と同盟を締結することに心血を注いだ。

これを助けたのは駐英公使の林董(ただす)や北清事変当時の在北京公使を務めた柴五郎中佐の活躍を知るクロード・マクドナルド氏である(後に日本公使に就任)。彼は英国のビクトリア女王や多くの国から数々の勲章を受けた柴中佐に傾倒し、日英同盟の影の立役者になる。20世紀に入る迄、他国との同盟関係を結ぶこと無く「栄光ある孤立」を方針として世界に君臨していた大英帝国が、日露戦が必至となった1902年1月30日英国主導で日英同盟が締結したのだが、英国の初の同盟国が黄色人種の一小国日本だった事に、白人国家は驚いた。もちろん支那に支配権を確立しつつあるロシアを牽制する目論見もあったろうし、日本が勝てないまでもロシアの国力を減衰させてくれれば良いとの思惑もあったろう。しかし英国は日本の如き弱小国家と同盟を結ぶ必要があるのか?この様な疑問の声は英国内の白人社会から上がったのも事実だった。にも拘らず英国は日本を欲したのだが、実はその日英同盟の背景には、イギリスの日本に対する大きな信頼があったのだ。その原因は柴五郎中佐であった。中佐の勇気と何よりもその人間性に誰もが敬意を寄せたからだ。



柴 五郎

後に出版された「北京籠城」の中でピーターフレミングは「日本軍を指導した柴中佐は籠城中どの国の軍隊の士官よりも勇敢で、経験があっただけでなく、誰からも好かれ尊敬されていた」と評価している。「外国人の中で、日本人ほど男らしく奮闘し、その任務を全うした国民はいない」とロンドンタイムスの社説の一節だが、同様の評価が各国に浸透した。

一方で日本政府には同盟推進派の桂と恐露派の伊藤・井上の2元老が居り、日英同盟に反対していた。恐露派はロシアと協商関係を結ぶ、つまり「話し合」で

日露の問題を解決すべきだと主張していた。伊藤はこの秋（明治37年）ロシア側と協議するために米国、欧州経由でロシアに向かった。その旅の途中、桂に対し「自分とロシアの協議が終わるまで、同盟の結論を待つてほしい」と打電した。しかし桂や小村は待たなかった。英国の方が「名誉ある孤立」を捨て、同盟に積極的になっている、この機会をのがさなかったのである。

12月7日伊藤抜きで、桂の葉山の別荘での元老会議で「ロシアは侵略主義だから、協商で平和が生まれても一時的だ」と斬って捨てる小村の迫力に押されて、元老会議もゴーサインを出し、明治35年（1902年）1月30日にロンドンで日英同盟は締結された。中身は・・・

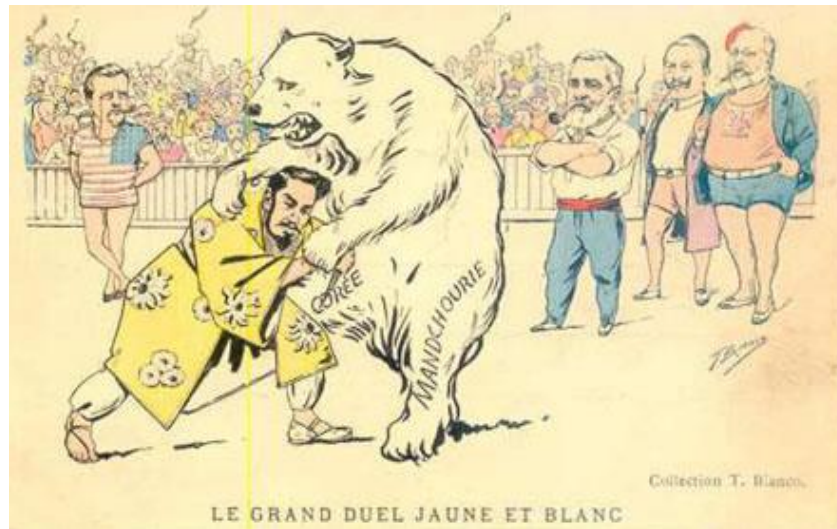
- (1) 英国は清国に於ける日本の清国、朝鮮に関する利益保護の為に共動行動する。
- (2) 利益保護の為にいずれの国が第三国と交戦する時、もう一国は厳正中立を守る。

などが柱であった。両国にとって第三国とは明らかにロシアを示すのは明らかである。私が英国同盟の学びに固執する理由は、一人の日本人の行動と人格が国や世界を動かすというこの実例である。本来の日本を取り戻すことにより、未来に、アインシュタインが望んだ様な日本国や、そのような日本から柴五郎中佐の様な人物が生まれ、世界平和の為にリーダーが必ず出現すると信じて止まないからである。その為に志雲会は元の日本、従来あるべき姿の日本を取り戻すため学びの場として存在するのである。

## <宣戦布告>

ロシアの総司令官クロパトキンは「日本兵三人に対してロシアは一人で間に合う。これは戦争というよりも、単に軍事的な散歩に過ぎない。戦争はロシアの日本上陸を以て終わると固く確信する」と豪語した。日本は開国して30年くらいしか経っていない、まだ暮らしも貧しく、近代技術もほとんど輸入に頼っていた極東地区の片隅に存在する小さな国が、世界最大の国家ロシアと戦うなど、世界は象に立ち向かう蟻としか日本を見なかったのである。また有色人種が白人と戦えるなど考えてもみない時代だった。「ロシアは親指、日本はノミ」とロシアの高官は侮辱の笑を浮かべ公言していた。白人主義の世界での小国日本、誰もが領かざるを得ない言葉だったのだ。日本はアジアの中で列強に対し独立を守り抜く為に、決して失敗を許されない戦いを綱渡りのように渡って行くのであ

る。ひたすら国家と民族を守る為に。



巨大な白熊と戦う明治天皇を描いた当時の風刺画

今の日本にこの気概があるだろうか？次回は日本が勝利を収めた奇跡の原因や戦いの中のエピソードも学んでゆきたい。日本は撤兵期限（満州からの）をあっさり破棄するロシアに対し危機感を強め、満韓交換論（満州に日本は口を挟まない代わりに、ロシアは朝鮮に手を出さない）まで出る程、朝鮮は日本の安全保障にとって要所だった。この様な日本の危機感の中、「竜岩浦（りゅうがんぼ）占拠」の一報はロシアが越えてはならぬ一線を越えたと日本が受け取るのは当然であったろう。これが開戦の口火となった。

注）竜岩浦武力占拠

「森林開発を口実に竜岩浦を武力で占拠し、兵営工事を始めた」という報告。

平成27年6月9日

志雲会塾長 有馬正能